

二〇一三年度 卒業論文

浅原才市に見る浄土真宗的实践生活

L100017

梅田遼

目次

序論	1
本論	
第一章 浅原才市の来歴	
第一節 浅原才市の生涯を辿る	3
第二節 才市と父西教	6
第三節 才市と梅田謙敬師	8
第二章 浅原才市の「口あい」	
第一節 ざんぎとかんぎ	10
第二節 信心を得て	13
第三節 よろこび	14
第四節 生活の中での南無阿弥陀仏	16
第三章 僧侶の活動という視点からみた才市の信仰生活	
第一節 宣教会とは	19
第二節 才市と宣教会	21

結論.....

註

資料

参考文献

序論

私が卒業論文で取り挙げるテーマは「浅原才市に見る浄土真宗的实践」である。私がこのテーマを取り上げた理由の一つは、私の寺が浅原才市ゆかりの寺であることだ。子供の時から浅原才市（1850～1932）のゆかりの品や詩に触れてきたため馴染みが深いということに加えて、才市に関する資料についても、文献だけでなく、才市が実際に仕事に使っていた部屋や下駄などの道具等を、我が家で管理をしているため、才市についての幅広い視点から研究を進められるという、大変恵まれた環境にあることはいまでもない。

しかし、最も大きな理由は、真宗を学問として研究していく中で、才市の浄土真宗の信仰生活に、純粹に関心が生じて来たからである。私は幼い頃から、才市の詩を聞き、その自画像を見て育ったのだが、その宗教的意味については、さっぱり分からなかった。だがこうして、大学の専門分野として浄土真宗について学びを深める中で、次第にその意味が理解できるようになってきた。しかし、理屈としての意味は分かるが、それが自分自身の体験と結びつけて捉える事が出来るかと言うと、それは怪しい。真宗を信仰する者としてその教えの意義を学び、ありがたさを感じることもあるのだが、どれだけ勉強をしようとも、信仰の体験なくしては、信心は獲得出来るものではないのである。だからこそ私は、才市のように、まさしく浄土真宗の信心を得た人について研究してみようと考えたのである。いったい浅原才市のように、妙好人と呼ばれる人々は、私達の生活に近い等身大的なモデルとして理解できるが、では妙好人は実際にどのような想いを持って生活していたのか、そして彼らは、日常の暮らしの中でどのようなようにして教えをいただいていたのかといったことに特に関心をもつようになったのである。

次に妙好人を論文のテーマに取り上げる重要性についてであるが、私は、まず浄土真宗の教義についての研究は、その教えを自らがいただくことが前提としてあると考えている。真宗の教えを、客観的な学問の研究対象としてだけであると考えたことは、学問の研究としては意義のあることかもしれないが、私にとっては、学問的な研究は方法であって目的ではないからである。特に妙好人を論文に取り上げる場合には、その前提として、最低限の実践的理解として、妙好人が信仰した教えをいただくことが必要なのではないかと思うのである。現に妙好人と呼ばれる人たちは、知識としての「学」はあまりないにも拘らず、その生き方は浄土真宗の教えに全く即したものである。もちろん真宗の教義を、客観的な学問の対象として研究することを軽視するわけではない。だが少なくとも、今の私にとっては、これまで学んできた事柄が、実際にどのようなようにして実践的生活に表れているかを確認することで、教義の理解を深めることが出来るのではないかと考えるのである。

本論文の、全体の構成は、まず第一章では、浅原才市がどのような人物であったのか理解するために、特に、才市と特に縁の深い人物との関わりを介して、その事跡を検討する。次に、第二章では、なぜ私は浄土真宗の教えによって救われるのか、またその正因である「信心」とは何か、についての疑問を、才市の残した「口あい」と呼ばれる詩をとりあげながら、それが才市の浄土真宗の信仰の生活の中で、真宗の救済の教えが実際にどのように働いていたのかを確かめながら考察する。最後に、第三章では、二章までで取り上げた才市の生活と浄土真宗の教えとの関わりを可能にしたものは何であったのか、そして浄土真宗の僧侶は、これまでどのような宗教的生活とどのように関わってきたのか、そして私も含めて、現代の僧侶がこれからどのように拘っていくべきかに

ついで、モデルケースとして、才市の信仰と深い関わりがあった「宣教会」の活動を取り上げて考察する。

本論

第一章 浅原才市の来歴

この章では、浅原才市の生涯と、その信仰へと大きな影響を与えた、父西教と、才市を出家した寺である安楽寺の第十代住職の梅田謙敬師の二人を取り上げ、才市がどのような縁によって信心を得たのかについて考察する。なお本章で取り上げた才市の事績は、主として佐藤平氏の論文「浅原才市年譜」を参考にさせて頂いた。

第一節 浅原才市の生涯を辿る

石見国福光村には「堀ヶ迫」という家があり、その分家に同国大浜村小浜（現在の島根県大田市温泉津町小浜）に「鍛冶屋」（姓浅原）という家があった。この家の二男として生まれ分家した伊三郎と、同村「大家屋」の女性との間に生まれた一子、要四朗と名づけられたのが才市の父である。要四朗は同村の「原田屋」の女すぎを娶り、嘉永三年（1850年）二月二十日、才市が生まれた。

しかし十年後である万延元年、才市が十一歳になった年に父要四朗は、母すぎと離婚して実質的な出家を遂げ

1(以下要四朗を西教と表記する)、才市はすぎに連れられて、母の実家である「原田屋」に行くこととなった。すぎは間もなく同じ村の「小鉄屋」和平のもとに再婚し、残された才市は西教の母の実家に当たる「大家屋」に大工弟子として年期奉公に出された。

やがて二十歳になろうかという頃、大工の年期奉公を終えて、船大工として浜田県の和木・都野津方面へと出稼ぎに行き始め、二十五歳にせつという女性と結婚し、四年後には長女さきが生まれた。

才市が三十三歳になる年には、京の西本願寺で帰敬式を受けると(法名釈秀素)、さらに二年後には「見真大師御旧跡二十四輩巡り」をした。

明治二十六年、父西教は老悴のために涅槃寺から才市の家へと帰ることとなったが、その翌年である明治二十七年の一月三日に往生した。才市が四十五歳になる年のことであった。

翌年には妻のせつに西本願寺で帰敬式を受けさせた、法名を釈尼幸流といった。また翌年には東北地方の津波被災者に対して救援金として一円を送っている。

明治三十七年、出稼ぎ先を引き払い、小浜で下駄職を始めた。また同年大日本仏教慈善会の会員となった。

四年後、才市が五十九歳になる年の二月十五日に、母すぎが往生された。「宣教会」が結成したのもこの年のことである。²

大正元年、五月一日から五日の間まで西楽寺(現温泉津町温泉津)で親鸞聖人六百五十回忌法要が行われたが、ここで才市信心得心に関する有名な話があるので紹介しておこう。このときに行われた御法話で³、

「信心を得るのは大変難しいことで、例えば富籤に当たるようなものだ」

と説明され、今から当たったものを読むから良く聴くように、と言われた後『御文章』の五帖目御一通を読み始め、「末代无智の在家止住の男女たらんともがらは」というところまで読まれたとき、聴衆の一番前に座っていた才市が突然立ち上がり、

「当たった、当たった、わしに当たった」

と叫び、両手を挙げたまま一回転し、やがて恥ずかしそうに座ったという。また才市は安楽寺（現温泉津町小浜）法話のときにも法悦のあまり「ありがたいなあ」と言っ度々立ち上がる事があり、同じく法座に参っていた人たちも「今日は何度立ち上がるか」と楽しみにしていたそうである。

翌年には木片や鮑屑や紙切れに自らのお味わいを書きつけた「口あい」と呼ばれる宗教詩を、安楽寺院代池永義亮師の勧めによってノートに書き写し始める。また才市が書き始めて少しした後、義亮師は才市と同じような表記法でもって御文章の四帖目第四通・第八通・第十五通を書き写し才市に贈っている。

それからまた一年が過ぎた頃に、『妙好人浅原才市集』（鈴木大拙編）の「ノート一」「ノート二」「ノート三」、『妙好人才市の歌一』（楠恭著）の「第一ノート」「第三ノート」を書いた。そして『浅原才市翁を語る』の著者であり、才市を世に広めることに大きな役割を担った寺本慧達師が才市と出会ったのもこの年であった⁴。

才市はそれから凶作や災害の憂き目にあった方たちや、西本願寺へと寄付金を寄進したり、「口あい」を書き続けたりした。

慧達師に会ってから五年後である大正八年に、慧達師が「生ける妙好人浅原才市」を『法爾』の誌上で発表したのである。またこの年の暮れに、小浜の画伯に頼んで自身の肖像画を描いてもらっている。ただしそれは鬼の角が生えた姿で合掌をするという奇特な絵であった。⁵そして大正八年には、ついに西本願寺より執行長今里游玄師の名によって、才市の奇特が賞され表彰されたのである。

昭和七年、慧達師がハワイに行くことになり、お別れのために一月五日に才市を訪ねた。そのときに慧達師から才市にノートを譲ってくれないかと頼まれ、才市は慧達師にノートを譲った⁶。才市はその五日後、八十三歳で浄土に往生した。

第二節 才市と父西教

父西教は、第一節で述べたように、才市の人生において大きな転機をもたらした人物である。父の突然の（事実上の）出家と母の再婚によって、才市は年期奉公に出されたのである。しかも父西教は、温泉津の小浜に帰ってくるときには、破れた衣をまもっていたため村の人たちに「乞食坊主」「座敷乞食」と呼ばれていた⁷。しかし西教は邪険に扱われるというわけでもなく、町の子供たちに懐かれて、「西教さん」「西教さん」と子供たちが呼んでついて歩くと、西教は子供たちの頭を撫でて、

わしらは、みんな、いっけ（親類）だけーなー　　と言いなら、やがて彼がー

「口ほど手足が、たつならば」

と歌えば、子供たちは、それに和して、

「ほかに不足は、ごせんわい（御座いません）」

と歌う。子供たちが、この親しい世捨て人を見て、

「西教さん、口ほど手足がたつならば」

と歌う。西教は、子供に和して、

「ほかに不足は、ごせんわい」

と歌った。⁸

と親しまれていたようである。しかし才市にはこのような父親の姿を、世間に対して恥ずかしく思っていたよう
で、

（省略）

ゆうも ゆわんもなく

をや（親）がしぬればよいと をもいました

なして（なぜ） わしがをやわ

しなんで（死なないで） あるをかと をもいました

（省略）⁹

という歌を残している。結婚してからも西教の存在は才市の悩みの種であり、父はどうして家に帰ってこないの

かと、父と死別するその時まで悩み続けたのである。才市が西教を受け入れられなかったのは、二人の人生経験の違いのせいであったのだろうか。まだ五十も生きていない人間が、還暦を過ぎた方と同じような感性を理解するなど余程の事が無い限り出来ようはずもなかったのだろうか。この西教の生活は、佐藤平氏が、それは「涅槃寺を中心に、あちこちの寺の法要や在々所々に開かれる在家の法座に手伝いを兼ねて出席し、仏法聴聞の生活だったらしい」¹⁰と述べているように、深く仏法に帰した生活であり、才市が何度も家に帰るように言ったが、父は頑として受け付けず、決して妥協しなかった。

しかし西教がその臨終に才市に遺したものは、口あいにも出てくる「おやのゆいごん なもあみだぶつ」であった。「なもあみだぶつ」を遺言とした父の姿が、才市を入信へと導く大きな助けとなったのである。父が往生してから才市はより一層法を求めるようになったようである。念仏三昧の行にふけったり、お説教や法話会に参詣したりしたのである。そして八年後には、上記にあるようなエピソードでもって、才市がついに信心を得たことを確認することが出来る。

第三節 才市と梅田謙敬師

梅田謙敬師は(以下、謙敬と表記する)、現在の温泉津町小浜にある安楽寺の第十代住職である。本堂と庫裡の全焼や父の早逝と苦難の連続であったが、大学林で本願寺学生頭となるばかりではなく、真宗教学の研鑽を積み、勸学を拝命している。

謙敬の安樂寺で御法座が開かれると、才市はそれに何度も足を運び、聴聞を重ねたようである。法座が終わると、真宗の教えで分からぬところを聴きに行き、真宗理解の助けとしていた。その謙敬の影響は口あいにも見ることが出来る。

例えば、才市は『御文章』を毎日読んでいた影響のせいか、機法一体というような蓮如上人の言葉が見られることもあるが、口あいには機法一体という言葉を用いずともその深い味わいが綴られているのである。

ごくらくのほとけが

わしのむねには(生)え

あらわれてくださるじひが

なむあみだぶつ¹

あなたところが わたしのところ

わしのところが あなたのところ

ありがたいな

なむもわしがで(わたしのもの) あみだもわしが

これがひとつの なむあみだぶつ¹²

この他にも、才市の口あいには、私と阿弥陀仏との関係についての様々な詩が記されている。才市は聴聞を通し

て学んだ教義を頭だけで理解するのではなく、そうした研鑽を重ねることによって、自分自身の言葉で、自分自身のこととして受け止めていたのである。

小結

才市の信仰を記した口あいには、才市自身の実直さがそのまま現れているが、そこには、彼自身の様々な人生経験と、梅田謙敬師のように、教学の研鑽を積まれた師との出会いによって培われてきたのである。ではこの才市の信仰の土台となるものを踏まえたうえで、次の章では、その信仰の内容を考察してゆく。

第二章 浅原才市の「口あい」

第一章の才市の生涯で紹介したように、才市は「口あい」という宗教的即興詩を数多く残している。この章ではその「口あい」を取り上げ、「なぜ私が救われるのか」「信心を得る（或いは救われる）とはどういうことか」「喜びとは」について、才市がどのような表現を用いているのかを取り上げ、それを基に「実際の生活の中ではどうなのか」という問題について考察してゆく。

第一節 ざんぎとかんぎ

まずは才市と阿弥陀について考えてみたい。才市の詩には、自分自身の罪深い「私」の姿を記したものと、そんな「私」が阿弥陀仏に救いとられる姿に気づいてゆくものがある。前者においては、

さいちわ(は)あくむし(悪虫)で

あく(悪)のなかのあくむしで

正上せせ(生生世世)のあくむしで

あくをは太らくあくむして(で)

むし(虫)をころいて(殺して)正くもつ(食物)二(に)する

あく二ん(悪人)であさましや

あさましやこれがわ太し二

むくい(報い)ますあさましや

あさましやさいちわ(は)じやけん(邪険)

ものでござりますあさましや

ひとのことゆうてをもをて(思うて)

わがみをしらの(知らぬ)じやけんもの

わがみをしらの(知らぬ)じやけんもの

とわ(は)さいちがことよあさましや

むかしもいまもころかわらの(変わらぬ)

あさましやあさましや

あさましやあさましや

な二ごともゆうもからる(語る)もみなをそ(嘘)よをそ(嘘)二むくう(報う)

くる(来る)じごく(地獄)¹³

と自身の煩惱や罪に苛まれている。しかしそんな私が

わしのくらやみ(暗闇)

あかり(明り)をつけて

く太さるじひ(慈悲)が

なむあみ太ぶつ¹⁴

と阿弥陀仏に苦しみを晴らされるのである。この救われ難い罪悪生死の凡夫であるところの私と、それを救う阿弥陀仏の関係は、真宗の教義では機の深信・法の深信と表される。才市の詩の中には、この関係を端的に示した歌がある。

わ太しやあな太二

よいものもろ太(貫うた)

こころみるさんぎ(慚愧)の

かがみ(鏡)もろを太よ

ま太もろ太よ

じひ(慈悲)をみるくわんぎ(歡喜)の

かがみもろ太よ¹⁵

阿弥陀仏は救われぬ私達こそを救う、だから煩惱にまみれた私達が、その罪深さに気が付くと同時に、それが救いの対象となることが知らされるのである。逆に阿弥陀仏の慈悲を知ったことで自らの罪深さを自覚することもある。才市は日々を生活するなかで、ふとした拍子にこうして有難く思ったり、罪深さに沈んだりするのである。

第二節 信心を得て

さてではこの二つの深信によって、罪悪生死の私達と仏の本願力とを疑い無く信じることが出来たならばどうなるだろうか。信心を得たから煩惱が消えて、穏やかな、ある種の悟りを開いたような心境になる、と捉えられがちであるが、それは間違いである。私達凡夫はたとえ信心を得たとしても、生きている限りは煩惱は消えず、悪を重ね続けてしまうような救い難い存在なのだ。

しんで(死んで)まいるじやない

しぬるまであく(悪)をつくりて

しなず二まいるをやのさと(里)

しなず二もをす(申す)み太のねんぶつ(念仏)¹⁶

かぜ(風)わふけでもやまわ(山は)いごかの(動かぬ)

もをねん(妄念)のかぜわ(は)ふけども

こころいごかの(動かぬ)なむあみ太ぶ仁

こころとられて¹⁷

と才市の歌にあるように、浄土真宗の信心を得た人は、煩惱がまだあつて心がまだ晴れたわけではないけれども、心は晴れやかである。という矛盾したような心境なのだ。それはちょうど「正信念仏偈」に出てくる

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇

(日光が雲や霧に隠れていたとしても、その下は明るくて闇が無い)

の二句の意味に通ずる。確かに信心を得られたことで後生の不安は無くなるが、だからと言って煩惱が無くなるわけではないのだ。才市の詩に記されるように、ずっと私と阿弥陀如来とに向き合い続けてゆくのである。

第三節 よろこび

だがしかし、煩惱がまだある私達は阿弥陀仏を素直によるこべない。そんな私はもうどうしようもないのではないか、という疑念に当たるのである。しかし才市は、

才市よい うれしいか ありがたいか

ありがたいときゃ ありがたい

なつとも(何とも)ないときゃ なつともない

才市、なつともないときゃ どがあすりや(どうするか)

どかあも(どうにも) しようがないよ

なむあみだぶと

どんぐりへんぐりしているよ

今日も来る日も やーい やーい¹⁸

と、ある種開き直ったかのような割り切った考えをしているのである。しかし同時に、

よろこびわ(は)ごをんほをしやの(御恩報謝)

よろこびでなむあみ太ぶを

ゆうてよろこぶ

さいちよろこびをあて(当て)二して

は(は)をらん(居らん)かい・いいやの

いいやのよろこびわ(喜びは)かぜの

よをな(ような)ものであて二わ(は)ならの(ならぬ)

ふいて二げる(逃げる)よあとか太もなし¹⁹
と言って、喜びに傾倒することを戒めているのである。

第四節 生活の中での南無阿弥陀仏

次に才市が自分の暮らしの中で阿弥陀仏をどのように感じていたかについて、彼の口あいをとおして考察してゆく。才市の口あいを見て行くと、彼は日常の様々な事柄の中に阿弥陀仏の働きを感じていたようである。才市は世界に阿弥陀仏の働き(あるいは阿弥陀仏そのもの)が満ち満ちていて、自身を包みこんでいる様子を口あいで次のように表現している。

ゑえな(いいな)、

せかい(世界)、こくう(虚空)がみなほとけ

わしもそのなか、なむあみだぶつ²⁰。

このせかい、ぶつのせかいでござります。

ぶつのせかに、正(生)をうけさせ、

ごをんうれしや、なむあみだぶつ、

なむあみだぶつ²¹

そして阿弥陀仏の働きに包まれているという実感は、自然と「なむあみだぶつ」と口から出てくるのである。

かぜをひけばせきが出る

さいちが御ほうぎの風をひいた

念仏のせきが出る出る²²

とは、自然と漏れ出てくるあみだぶつという念仏を通して、阿弥陀仏の働きを感じていたのである。

最後に、この論文のテーマとして選んだ「浄土真宗的实践生活」ということを、才市が見事に表した歌を紹介する。

さいちよい

なむあみだぶつ どが(どう)しておくものか

へ なむあみだぶつというものは

舌のつじ(先)に あげておくものであります

そうして しごとをすれば

まことに うまいあじがでます

あなたも あげといてみなされ

なむあみだぶつは うまいもんであります²³

浄土真宗の生活とは、才市のこの詩に表現されているように、阿弥陀仏と隣り合って日々を送ることではない

だろうか。それは、信心を得たらそれで終わる、ということではない。先に紹介した才市の詩にもあるように、私達は救い難い悪や煩惱にまみれており、信心を得たからと言ってそれらが全て無くなる事はない。そこで、聴聞を重ね、念仏して教えに帰してゆくことで、生活の中で自分自身を内省し、振舞いを正すなどする中で、ふと湧き起こってくる不安が和らいでいくといった働きがある。

これらの働きは、まさに親鸞の教えに示されるような、阿弥陀仏の本願に任せるための働きである²⁴。しかしそれを知るだけでは生活には結びつかない。教えをより深く聴くことで、やがて自然と教えを私の事として受け止められるようになるのだが、才市の姿から、真実の教えが世俗の暮らしの中でどのように活かしているのを見ることが出来る。才市の「口あい」から、浄土真宗が生活に即した形で示されるのである。

小結

二節でも取り上げたように、浄土真宗の信仰の生活とは何かをしたからそれで終わり、というものではない。絶えることなく阿弥陀仏の教えに帰して行き、往生に向かつて行く生活こそ、浄土真宗に関わるものとして目指すべき実践である。その心構えを、絶えること無く精進・努力をする生活とはつまり、真実の道を求め続けることが仏道においての模範なのである²⁵。

信心を得てからの歓びもまたこうした生活において生まれてくる。才市のように信心を得た現生正定聚の人である妙好人たちは、道を求めて聴聞や念仏を続けた。それは阿弥陀仏と共に在る生活それ自体が歓びであり救い

だったからではないだろうか。自分が凡夫であるという自覚は、自分は何をしても無駄だ、あるいは救ってくれるのならば自分は何もせず任せるといった誤った方向へと向かうのではなく、阿弥陀仏に身を任せるために努力を続けることで初めて歓びや救いがあるのだ。才市はその内容を膨大な数の詩に記している。様々な場面での味わいを記した口あいは、浄土真宗の生活と信心のあり方を研究するために非常に有用であり、自己自身と浄土真宗との関わりを顧みる際の大きな手掛かりとなるだろう。

第三章 僧侶の活動という視点からみた才市の信仰生活

第一章と第二章では、才市の事績と彼が残した口あいを通して、その信仰生活を論じてきたが、第三章では、私達僧侶の活動という視点からそれを再検討してみたい。才市に限らず信心を得る際には、教えをもたらしてくれるような存在がある。僧侶の役目は、そのように阿弥陀如来の教えを広めることに参与させて頂くことだ。そのためには私達僧侶に何が出来るだろうか。本章では、第一章でも名前挙げた「宣教会」の活動について論じると共に、才市との関わりを通して、僧侶の活動について論じて行く。

第一節 宣教会とは

宣教会とは、明治四十一年（1908）に、石見地方で結成された自信教人信の實踐に邁進する自治的な集ま

りである。同年七月十三日、瑞泉寺において初会合を開き、十月二十一、二十二日天河内・満行寺において創立総会を催したのがその発足であると記録されている。しかしこの創立総会までの間に、すでに巡回伝道を行っていたようであり、当時の人々の熱意を伺う事が出来る。会の設立発起人は菅諦円師・高木猿月師・小笠原了遠師・藤本文豪師・竜末法幢・梅田謙敬・菅原誓成・鷺谷護城・朝枝不朽・服部範嶺の十一人で、梅田謙敬師も設立に関わり、尽力したのである。この会が発足した理由は法に触れる立場を少しでも増やそうとするためであり、宣教会という名前も『大無量寿経』の

広闡道教 欲拯群萌²⁶。

の文から来ている。その活動は多岐に亘るが、代表的なものとして、法座と研究会が挙げられる。

法座とは決められた寺へと講師を派遣して講演を行うものであり、それは無償で行われた。本来法座を開くためには費用が掛かってしまうため、法を聴く機会を増やすために無償と言う形で行われるのである。また現在ではされていないが、法座の際に、ベテランの講師の方と、若手とが二人一組で派遣され、若手はベテランの方のお話を聴き、後に互いに意見を交えるなど、世代間の交流が行われていた。そして研究会だが、これは僧侶自身が浄土真宗について学び、その理解を深めるために行われ、地域の外部から、さまざまな講師を招聘して開催される。このように外へ向けての活動と、活動する僧侶自身の養成という二つの側面をこの会は持っているのである。自身教人信の実践の活動であると言えよう。

第二節 才市と宣教会

さて才市が五十九歳のときに発足した宣教会だが、そのメンバーには謙敬も在籍していた。また才市がいつも参詣していた他の寺である西楽寺や瑞光寺や瑞泉寺、願楽寺の住職が創立者として熱意を傾けている宣教会に対して、才市もまた関心を寄せるのはむしろ当然であった。

せん京かい(宣教会)わみ太(弥陀)のかい(会)

さいちう(才市を)ほとけ二するかいで

ごかい三さま(御開山様) わしがかい²⁷

という才市の歌が残っている。宣教会を弥陀の会と尊重し、自分を仏にする会と感謝し、わしの会と応援したのである。才市は宣教会を、自らを育てる会であると捉えたのである。加えて才市はこの会に寄付をしているのだが、明治四十五年に一円の寄付を送ったばかりか大正五年、六年、七年、八年、九年、十一年、昭和二年と重ねて寄付を送り、亡くなるまで合わせて十数回もの寄付を送ったようである。他にもまれに三、四回寄付を送る方も居られたようだが、十数回も寄付を続けた人は才市だけであった。

さて才市にとって宣教会は「才市を仏にする会」であり、この会に関わる僧侶たちから教えをうけるとともに、非常に親しくしていた様子を知ることが出来る。では宣教会や僧侶にとって、才市とはどのような存在だったのだろうか。

非常に有難いことに安楽寺にそのことを示す資料が遺されていたため、ここに書き記すこととする。

浅原才市老人の逝去を悼みて

ゆきましし 後に思えば 今さらに こひしたはしき（恋慕わしき）

法（のり）の言の葉²⁸。

謙敬にとつても才市は得難い人物であり、その死を惜しんでいることがここから伺える。

才市にとつて宣教会は有難い会であり、また、宣教会にとつても才市は有難い支持者であった。

小結

僧侶の役目とは法を広め、阿弥陀仏の教えを広める活動に参加することである。そのためには外への発信のみならず、自身の教義理解を深めることもまた重要である。才市にとつて宣教会が「才市を仏にする会」であったように、仏教に携わるものとして、積極的な内外への活動により教えを広めて行くことが僧侶としての命題である。それはいつの時代においても変わらない。無縁社会と呼ばれる現代社会においても、様々な形での布教活動が行われているが、この宣教会はその一つのモデルケースとして挙げられるだろう。地域や寺同士の連携した繋がりと、その成果等については、今後の研究の課題として学びを深めていきたい。

結論

才市の生活は常に阿弥陀仏とともにある生活であった。念仏を味わい、阿弥陀仏を感じ、浄土真宗が生活に寄り添うように一体となっていたのである。謙敬が、才市の角の生えた肖像画に描いた讃が、この才市の（或いは念仏者の）生活の様子をよく表しているため、ここで紹介する。

角あるは機なり

合掌するは法なり

法よく機を撰し

三業を柔軟ならしむ

火車因滅し

甘露心にあきたる

未だ終焉に至らずして

華台迎接す

才市の生活は未だ煩惱がある身でありながら、心は晴れやかであった。口あいの中には自身の悪深さを嘆く歌もあり誤解されがちであるが、才市の人柄は朗らかで実直であった。彼の例は、生活を豊かにするものとして、浄土真宗が人々に寄り添うという姿を現してくれた。宗教の大きな役割として、人に寄り添い不安を和らげるといふものがあるが、ここにおいて浄土真宗は宗教としての役割を十全に果たしていると言えるだろう。生活に寄

り添い、不安や罪悪感を和らげ安心を齎し、やがてその生活は穏やかなものとなる。そして死ぬまでを念仏とともに生き、やがて浄土へ往生するので。浄土真宗で示される現生正定衆の味わいとその姿を、才市から見ることが出来るのである。

いったいなぜありがたいのか、そもそも信心とは何なのだろうか、信心を得た人にとっての阿弥陀仏とはどのような存在なのだろうか、そういった未だ信心を得られていない者にとって、才市の歌を理解することは困難である。しかし聴聞を重ね、教義を学びながら、才市の歌をまた聴くことによって、以前には無い発見をすることが出来るようになるだろう。浄土真宗において、彼のような妙好人とよばれる人たちの存在は、親鸞聖人の説かれた浄土真宗の教えが我々の生活から遠いものとして捉えられそうになる時に、私たちがその信仰の生活のただ中へと橋渡しをしてくれる。そして親鸞聖人の「御同朋・御同行」という言葉から、我々もまた宗祖と同じ阿弥陀仏の教えに帰して行く仲間である事を忘れてはならない。宗教に対して風あたりの強く、生活との距離が離れてしまっている現代社会において、生活に寄り添った宗教としての浄土真宗を才市は教えてくれるのである。

最後に、第三章で才市との関わりについてのみ取り上げ簡単な説明で紹介した宣教会だが、現在も活動を続けているこの組織は、非常に多岐にわたる活動と、また地域的に独特な性格を持っている。才市に影響を与えたように、現在も、僧侶が広く社会に向かって人々が仏教に触れる機会を増やして行くための実践を目指す宣教会は、過去においてもそうであったように、現在でも非常に革新的存在である。私自身、いずれ住職を継ぎ浄土真宗の伝道に深く携わることを目指す者として、才市を育んだこの土壌を、これから先も活かして行くために、この宣

教会については、今後もさらに継続して研究を深めていきたい。

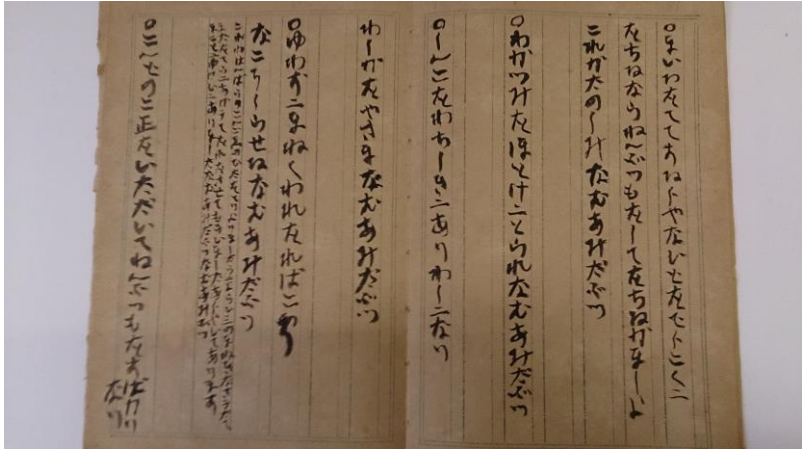
- 1 要四朗の師匠寺である涅槃寺の「過去帳」及び口伝に依れば、父要四朗は六歳のときに涅槃寺へ入寺し、その際法名の西教という名を授かった。この実質的な出家を遂げた後は西教と名乗るようになったという。
- 2 宣教会については第三章にて論じる。
- 3 このとき法話をされたのは、補佐として参られた西田瑞泉寺の住職、服部範嶺師である。
- 4 寺本慧達『浅原才市翁を語る』今原山長円寺(二〇〇四)八一頁より。才市との出会いの背景が書かれている。
- 5 この才市の頭に生える角は鬼の角であり、才市の救われ難い身を表すために画家にお願いして書いてもらっている。またこの肖像画には梅田謙教和上が讚を書いているのだが、それについては結論で論じる。
- 6 寺本慧達『浅原才市翁を語る』一〇九頁より。残念ながらここで譲ってもらった約七十冊の内約三十冊が震災で焼けてしまった。残りの三十冊数冊は楠氏の手で整えられ世に広められたのである。
- 7 佐藤平「浅原才市年譜」(『大谷女子大学紀要』二〇、四一頁、註一三より。なお寺本慧達『浅原才市翁を語る』二八頁では「野山に花を取り町で売ること生活の糧とした」と言う意味の記述がみられ、貧しい生活を送っていたように見えるが、どうやら法事や葬式の際に何かしらの御札を頂いていたためにこの「乞食」という表現は適切ではないと言える。しかしここで重要なのは彼が村の人たちに内実はどうあれ「どういふ風に見えたか」である。
- 8 寺本慧達『浅原才市翁を語る』二八頁。
- 9 寺本慧達『浅原才市翁を語る』二〇頁。
- 10 佐藤平「妙好人浅原才市の父親西教について」(『印度學佛教學研究』三三(二)、六七八頁)。
- 11 石見の才市顕彰会編『ご恩うれしや』妙好人「石見の才市」顕彰会(一九九五)、一七五頁
- 12 『ご恩うれしや』一七七頁
- 13 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』春秋社(一九九九)ノート九・三十。
- 14 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート十・八。

- 15 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート十・二十九。
16 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート十・四十五。
17 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート七・七十三。
18 寺本慧達『浅原才市翁を語る』八八頁。
19 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート十一・十六。
20 楠恭『妙好人才市の歌(一)』法蔵館(一九四九)、六・三十。
21 楠恭『妙好人才市の歌(一)』一・六十一。
22 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート十一・五十。
23 『(一)恩うれしや』一三六頁。
24 例えば、親鸞の書簡を集めた『末灯鈔』の第十通には「ただ如来の誓願にまかせまいらせたまふべく候。とかくの御はからひあるべからず候なり」と記されている(『真宗聖典全書』一一・宗祖編、七九三頁)。
25 藤能成氏はこれを「現在進行形の研鑽」と表現されている。藤能成『現代社会の無明を超える―親鸞浄土教の可能性―』法蔵館(二〇一三)150-154頁を参照。
26 宣教会『宣教』(宣教会六十年史)、五頁。
27 鈴木大拙『妙好人 浅原才市集』ノート三十一・二十四。
28 安楽寺蔵の資料による。



四、浅原才市の法悦ノ一ト

参考文献



鈴木大拙 「妙好人、浅原才市を読み解く」(日本語訳)、『財団法人松ヶ丘文庫研究年報』二七(二〇一三)、三、
四二頁

鈴木大拙 『妙好人 浅原才市集』春秋社・一九九九

鈴木大拙 『妙好人』法蔵館・一九七六

鈴木大拙 『鈴木大拙全集』(久松真一、山口益、古田紹欽編)(八)岩波書店・一九九九〜二〇〇三

佐藤平 「浅原才市年譜」、『大谷女子大学紀要』二〇(一九八六)、三〇〜四九頁

楠恭 『妙好人才市の歌(一)』法蔵館・一九四九

佐藤平 「妙好人浅原才市の父親西教について」、『印度學佛教學研究』三三(二)(一九八五)、六七四〜六七八頁

寺本慧達 『浅原才市翁を語る』今原山長円寺・二〇〇四

石見の才市顕彰会 『ご恩うれしや』妙好人「石見の才市」顕彰会・一九九五

宣教会 『宣教』(宣教会六十年史)・二〇〇七

藤能成 「現代社会に巢食う虚無感を克服するために―妙好人の言行と仏智―(一)」、『真宗学』一二三・一二四

(二〇一一)、一四五〜一五九頁

藤能成 「現代社会に巢食う虚無感を克服するために―妙好人の言行と仏智―(二)」(『仏教文化』二〇(二〇一

一)、四一〜六九頁

藤能成 「資料紹介・浅原才市の二冊のノートについて」、『仏教文化』一三(二〇〇四)、一〇五〜一二三頁

本願寺出版社 『妙好人才市さんの世界』本願寺出版社・一九八一

朝枝善照 『さいちさん』永田文昌堂・一九九一

菊藤明道 『妙好人(みょうこうにん)…真の仏弟子』探究社・二〇一〇

菊藤明道 『妙好人伝の研究』法蔵館・二〇一一

川上清吉 『才市さんとその歌』百華苑・一九六七

梯實圓 『妙好人のことば.. わかりやすい名言名句』法蔵館・一九八九
藤能成 『現代社会の無明を超える―親鸞浄土教の可能性―』法蔵館・二〇一三
教学伝道研究センター編 『浄土真宗聖典(註釈版)』(第二版) 本願寺出版社・二〇〇九
教学伝道研究センター編 『浄土真宗聖典全書』二・宗祖編、本願寺出版社・二〇一一